

金子耕式のファミリートーク

北海道・東北・沖縄県にて好評放送中!!

その26



■コーンスープの思い出

11月末のある日、羽田空港で朝一番の札幌行きの便に乗るためにロビーで待っていました。なにげなく壁際の自動販売機に目をやると、今まで冷たい飲み物ばかりだったのが、半分くらい暖かい飲み物に代わっていることに気が付きました。東京も朝晩はめっきり寒くなりましたから、わたしは暖かいコーヒを飲みたくなって自販機の前に立ちました。すると、美味しそうなコーンスープが目に入りました。私はコーヒをやめてコーンスープのボタンを押し、ベンチに持ち帰って熱々の缶を、両手で包むようにして冷たい手を暖めながら飲みました。すると、なぜか小さい頃の思い出が蘇りました。私がまだ小学生の時、父と一緒に初めて新幹線に乗ったときのことです。父は公立中学校の教師をしていました。父は当時の教員は給料がとて低く、かなり貧乏な暮らしをしていました。そんな時代に家族で新幹線に乗った時、父は突然「耕式、食堂車に飲物を飲みに行こう」と言って、私を食堂車に連れて行ってくれたのです。当時の新幹線には食堂車があって、帝国ホテルが料理を提供していました。私にとって、新幹線に乗る事自体が特別な経験だったのに、まさか食堂車で高級な飲物を飲めるなんてまさに夢のようでした。その時父から勧められて飲んだのがコーンスープだったのです。あの時のことを57才の私が、急に思い出したのです。そして思えばなぜ私が、自販機でコーンスープを見つけるとついつい

ボタンを押してしまうのか、その理由がわかったのです。

それは、新幹線の中で私が感じた父親の愛情のためでした。学校の成績が悪く、いつも劣等感に悩まされていた当時の私にとって、父が食堂車でコーンスープを飲ませてくれたことがどんなに大きな出来事だったことか、昨年の夏88歳で亡くなった父には一度も話したことがありませんでしたが、こんな自分でも大切にされていると感じました。それは今の私の行動に影響を与え続けるほどのできごとだったのです。

■職場を子どもに見せる

親が子どもに仕事をしている姿や職場を見せることは、子どもの自立のために、また親子の絆を強めるためにも大いに意味のあることです。

小学生の頃、父が私を職場に連れて行ってくれたことがあります。私の父は中学校で教師をしていたので、授業のない夏休みに父に連れられて行ったのです。職員室に入ると数人の先生方が、「金子先生の息子さん？」と言いながらニコニコ出迎えてくださいました。父は職員室の奥の方まで私を案内し、「これがお父さんの机だよ」と教えてくれました。次に自分が担任をしていたクラスの教室を見せてくれました。さらに校舎から出てグラウンドを歩きました。夏休みでしたが、クラブ活動のために登校してきた生徒たちが、父に向かって「おはようございます」と礼儀正しく挨拶をしてきました。父にとっては、休みの日に私を職場に連れ

て行っただけのこともかもしれません。でも、私にとってそれはとても大きな出来事でした。だから、いまだにその日のことを鮮明に覚えています。職員室や教室を見て回り、生徒たちが礼儀正しく挨拶してくる姿を見た時、確かに父がそこで働いていることを実感して、なんだか父に対する尊敬の気持ちがこみ上げてきました。

昔は、多くの子どもたちが自分の親が仕事をする姿を見て育ちました。今でも、農業に従事する人たちはお子さんに働く姿を見せる機会が多いでしょう。あるいは、父親に比べて母親は、家の中においても家族のために働く姿をいつも見せているでしょう。でも、会社勤めが多くなった今の時代、父親が働く姿を見ることがなく育つ子どもたちもとても多いのです。

だからもし可能なら、休みの日などを利用してお子さんを職場に連れて行ってあげることがお勧めします。そうすることには、とても大きな意味があるのです。

子どもはやがて自立して大人になるわけですが、自分が将来どんな大人になつたら良いのか、それを最も説得力を持って示してくれるのは自分の親の働く姿かも知れないからです。

3月下旬発売予定

「家族に贈る
とっておきの話」
Vol.4



お待たせしました!
ファミリートークを、
じっくり、たっぷりお読み
ください。